

---

# 未昇華の想い

nakoso

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未昇華の想い

### 【Zマーク】

Z4515D

### 【作者名】

nakoso

### 【あらすじ】

「俺、結婚するんだわ」「おめでとう。」彼女は、まるで自分の事のように喜んだ。

田曜日。今日は、久し振りに完全フリーの日になった。

何かをしたかった、というわけではない。  
むしろ、何もしたくない気分だった。

三年前に大学を卒業して、順調に就職して、それからは安定至極の日々。

本当なら今日も予定を入れるべきだったのかもしれない。  
しかし、自分の中の整理を行うためには、どうしても足を運んで  
おきたい場所があった。

家から歩いて三十分ほどの所に流れている川。

そこに架かっている橋の下は、ちょっととした広場 と言つても  
公園のようなものではなく、広い空間がある、というだけの にな  
なつていた。

鮮やかな模様（波をイメージしているらしい）ではめられたタイ  
ルの階段を下り、橋の真下に下りる。

昼時前のせいで人の姿は見当たらない。

俺は広場を真っ直ぐ横切つて、川べりのベンチに座つた。  
田の前を左から右にサラサラと流れる水面を、ぼおつとして見つ  
める。

風は強すぎず弱すぎず、温もりを持つて首から上をくすぐる。

「 おはよっす

何をするでもなくただぼおつとしていると、すぐわざから声をかけられた。

左を振り向くと一人の女が、俺に笑顔を向けて座っている。

「久し振りじゃない、あんたがここに来るなんて？  
ここしばらくあなたの姿見てなかつたからさ、どうしたのかと思つてたところなんだ」

パステルブルーのワンピースが、春先のような彼女のイメージにピッタリ似合つ。

栗色の髪は肩にかかる程度の長さで、ほつそりした顔立ちは、どちらかといふと美人の枠に入る  
あくまで、俺の私的観点だけれども。

「ん~、最後に来たのは一年前か。それから忙しい事が立て続けにあつたからなあ、ここに来るヒマがなくて」

言つた後、思わずあくびが出る。彼女が一重の瞳を細め、くすりと小さく笑つた。

「まだ忙殺されてるらしきね。せつかくの日曜なんだから家でゆつくつしてればいいじゃない

一年前と同じ早い口調が心地良く聞こえるのは、さつと懐かしみのせいだらつ。

懐かしみ チクツ 胸の片隅が痛んだ。

「せっかくの日曜だから」「いや、ソレじゃねえや」「に来たんだよ」「ぶつきらぼうな物言い、相変わらす」

もし彼女を例えるなら、夏の空に浮かぶ霞み雲、といったところ。  
捕らえどりのない、捕らえても捕らえてもすり抜けられる、自由気ままな一筋の雲。

ソラして田の前にあるのに……

「俺も物好きだよな」「何、いきなり」「家から三十分も歩いてこないまで来て。ただぼおっとするのためにだけ」

水は流れる。  
流れ続ける。

水平に見える地面も、実はわずかに傾斜している事に気付かされる。

川の水を見なればわからない事実。

「私に会いに来てくれたんじゃないの?」「そうだけど」「意地つ張り」「……そうです。会いに来たんですよ」

満足そうに笑む彼女　ソラにはかなわない。

「でも、まさか会えるなんてね」「どうして？」

彼女は驚いたようだった。俺も驚いて、

「ここに来たから会えるっていつ保証はないだろ？  
今日だって、俺がここに来るなんて予想してなかつたはずだ」

彼女の顔に映つた驚きが、ゆっくりと微笑みに変わる。

「ずっと待つてたもの」

俺はア然とした。

「一年間、ずっと待つてたよ。  
あなたの性格だったらここに来ると思つてたんだけど、私つてば  
あなたの事を知つてるつもりだつただけみたい」

悲しそうに笑う彼女から、俺は思わず目をそらした。

肺が居心地の悪い空気を吸い込む。  
気まずくなつて対岸を見やつた。

深呼吸すると少しだけ気が楽になつた気がした。

「今日はどうして、ここに来る気になつたの？」

ゆつくりとした口調は、彼女から発せられたとは思えないほどに  
控え目だった。

また、胸の片隅が痛む。

言わないと 踏ん切りが付くまで、若干の時間を要した。

「……あのさ、俺、結婚するんだわ」

彼女は黙つて聞いてくれている。

「同じ職場の、1」「下なんだけど。今年の夏に結婚する」

心臓が跳ね上がって鼓動する。  
まるで喉元に心臓があるみたいだ。  
息が詰まる。

「おめでとうっー。」

ベンチの背もたれに寄りかかりながら見た彼女の顔は、まるで自分の事のように嬉しそうだ。

その顔がまた、胸の奥に潜む罪悪感をひきかせる。

「…………」「めん」

「な、あ、に辛氣臭い顔してんのよ」

言いながら彼女の拳が俺の頬を小突いた。

「そんな顔して。結婚控えた新郎がそんなでどうすんの？」

呆れの混じった言葉を吐いて、彼女はやおら立ち上がった。  
160センチの体を背伸びで伸ばす。

「偉せになりなよ。そんで偉せにしてあげな

「ん

「あのわあー

振り返った彼女が腰をかがめて俺の顔を覗き込んで来た。

「どうしてそう、暗い顔になっちゃう~ 私に負い田でも感じてる  
の？」

デジペシャだ。

「やうだとしたらほんとのバカ者だよ、あんた。

田の前に偉せが待つてゐつてこうのと、どうしていつも男つての  
は

と、オーバーにため息をついてみせる。

「こつはこんな女だ。  
何も変わっちゃいない。  
俺もそうだ。

変わらひ、変わらひと思つてみてもなかなか変われないのが現実。

変わりたい。

「私、といつといつ僕せにしてあげられなかつたね  
「…………いこよ。おまえのせいじやない」

せうとしか答えられない自分が憎かつた。

「大丈夫。あんたなり、せうと僕せにしてあげられるよ」

「なあ」

おまえは僕せだつたのか?

尋ねよつとした時、ふいに風が力強く田の前を風いだ。

「…………」

俺は、言葉を失つていた。

一陣の風が何食わぬ顔で過ぎ去つた後、彼女の姿は消えていた。

やわらかい流れのせせらぎだけが耳元に残っている。

辺りを見回し彼女を探そうかと思つて……俺は思い出した。

そうだ。どうして俺は忘れてたのか。

コメかマボロシか。

俺の現実と過去と、どっちがコメで、どっちがマボロシなんだろう?

彼女はここにいるはずがない。だって彼女は……

今まで俺と話していた彼女は、紛れもなく彼女本人だった。  
俺のよく知つてゐる女だつた。

一年前と何一つ変わらない姿の。

「……何だよ、今の」

呆然として呟く。頭の中を思い切り搔き乱されたような感じだつた。

俺の予定が決まつた。

少し遠いがヒマを持て余してゐる休日こまちょうどよい外出だらうと思い、すぐに川べりを後にした。

腕時計を見ると、四時を回つていた。

電車を乗り継いで、一つ目の駅の近くにある高台に登つた。

車で来れば良かったのだけど、そこには駐車場がない。  
路上駐車して切符切られるなんて嫌だし、それ以前に、今俺の車  
は婚約者が使っている。

柵に囲われた高台の頂上に踏み込むと、何か空気が変わった気が  
する。

同じ春の風なのに、柵を境にして根本的な何かが変わっている。  
ここには何度も来ているが、この感覚がないという日はない。

「あ、こんなにちは

足元から伸びる一筋の道をちよづいて歩いて来る一人の人物  
影を見て、俺は軽く会釈した。

「あい、じんじわせ

五十代半ばの女性。

コットンパンツに薄地のトレーナー、とラフな服装だが気品がある。

すっかり真っ白になつた毛髪 その顔は、俺の知る顔よりも瘦  
せこけていた。

背も幾分か曲がり始めている。

「家の方に行つたんですけど留守のよひだつたんで、ここに来て  
るのかなと思いまして」

「あらあら、わざわざ家にまで来てくれたの？」

笑顔満面で女性が言つ。

……こんなにシワが多かつただろ？

「はい。結婚が決まりましたので、その報告を  
「それはそれは。おめでとうございます」

深々と礼をされ、慌てて俺も礼した。

「本当に良かったわね 娘にも報告してあげなくちゃ

言つて、女性は自分が歩いて来た道を振り返つた。

こいつらの墓石が並ぶ様を、俺も女性越しに見やる。

「ここには何度も足を運んでいたからもうじっかり憶えている。  
女性の娘 彼女の墓は南西の日当たりのいい場所にある。

「娘の分まで、どうか幸せいなつてください。あ、迷惑だったかし  
ら？」

「いえ、とんでもありません」

涙ぐみ始めている様子の女性の胸中など、俺風情にわかるわけがない。

「幸せになりますか？」

「幸せになりますか？」

今までお世話をになりました

彼女の死に際に一緒にいた男として、これだけは。

彼女は生まれ付き体が弱かった。  
特に、心臓が。

小説などではもはや使い古されたネタであろうとも、現実として  
見つめるには相当キツイものだ。  
ましてや、俺は彼女の恋人だったんだから。

俺は、彼女の父親から異常なまでに嫌われていた。  
男親として、たった一人の子供である彼女を思いやる気持ちはわ  
かる。

ましてや、彼女は将来を奪い取られた身だったんだから。

父親はちょっとやそとの男に娘に近づいて欲しくなかつたんだ

と思つ。

いつ消えるとも知れない残り少ない人生の中、娘には穏やかに生きて欲しかつたんだ。

だから、父親は俺が彼女の見舞いに来る事を非常に嫌つていた。病院で俺と鉢合わせでもすれば、周囲などお構いなしに怒鳴り散らした。

対して、母親は父親とは反対の立場に立つてくれていて、父親と俺が二度と鉢合わせにならないように見舞いの日時を調節してくれた。

そのおかげで俺は、無難に彼女を見舞う事ができた。

一年前のその日。

ちょうど土曜日で、就職一年目の俺は休日だった。

昼食を外で済ませた後、病院に直行した。

彼女が買つてきて欲しいと言つていた女性ファッション雑誌（買うのにかなりの勇気が必要だった）をバッグの中に詰め込んで。

病室（なんと個室！）にノックして入ると、看護婦さんがちょうど彼女に定期検査を行なつてている途中だった。

体温やら血圧やら脈拍やら、体が弱いと検査する事も多い。

「おはよっす」

ベッドに横になつていた彼女が、看護婦さんの向こうで右手を上げた。

俺も、同じく右手を上げて応える。

「ちょっと待ってね。すぐに終わるから」

若い看護婦さんは、もはや顔馴染だった。

「「みんなさいね、せつかくの逢引の時間を縮めりやった」

しかも、あらかたの「タタタタを知つてたり。

「今日もいじ労さんでしたー」

検査器具の台車を押しながら退室した看護婦さんを見送り、彼女が手を振る。かと思ひきや、

「みやげ」

俺に向けて催促の手を差し出したり。

「これ買ひの、かなり恥ずかしかったんだぞ？ 感謝してくれよ」

バッグの中の雑誌を取り出して、手近の丸イスに腰かける。

「感謝してりつてば」

「うそつけ」

「ほんとだつて」

言いながら差し出した手を揺らす彼女に、俺は雑誌を手渡した。すると見るからに彼女は嬉しそうな顔をして、ページをめぐり始めた。

どうしてファッション雑誌なんか リクエストされた時に思つ

た疑問。

だが理性が疑問を口に出さなかった。

いろいろなファッショニに身を包んで街中を歩く　彼女にしてみれば、それが夢なんだ。

他の誰もが、自然に送つてゐる田常が、彼女にしてみれば憧れなんだ。

少しでも、可能な限り一いつつでも、その夢に近づいためなら俺はどんな協力でもする。

「つと、おこおこー！」

雑誌を読もうと上体を起こした彼女を、俺は慌てて止めた。

「んー？」

やや不機嫌そうに俺を見上げる彼女だが、引き下がるわけには行かない。

「おまえさ、自分の身を大事にしろよ。昨日の今日なんだしさ、体を少しでも休ませた方がいいって」

やわらかい彼女の栗色の髪を撫でながら囁つ。

昨日、俺が見舞つてた途中に発作を起こして、彼女は手術室に運ばれたのだ。

面会謝絶にならなかつたからこゝして俺は見舞いに来れてるけど、

今の彼女には少しでも休養が必要だ。

本当なら今日、俺は来ないつもりだったのだけど、彼女がどうしても読みたい雑誌があると電話までかけて来て、いつも見舞いにやつて来たわけだ。

「……ごめんね」

「何だよいきなり？」

仰向けの胸の上で立てた雑誌を楽しそうに見つめる彼女の唇から、ふいに弱々しい声がこぼれた。

心の底ではそんな彼女らしからぬ言動に戸惑つたけど、平静を装つていつも通りに応対した。

「あんただつてさ、恋人ができるたら一人でどうかに遊びに行つたりしたいでしょ？」

こんな、ムードなんて縁遠い病室なんかじゃなくて……

胸騒ぎ。戸惑いが目眩を引き起こす。

「いいんだよ」

努めて優しく、でも苛立ちぎみに言つた。

弱音を吐く彼女なんて見たくなかった。

どんなに切羽詰つた状況でも、何の根拠なしに胸を張つて強気でい続ける彼女が見たかった。

「俺はおまえが好きなんだ。」

おまえと一緒にいられる、この空間が好きだから……その……いちいち気にするのやめよう。

その事を俺が気にしてるわけでもないし、おまえが気にする必要もないし

胸騒ぎは、消えない。

胸の中で、毛むくじゃらの何かがうごめくよつと。

「……ん、」めん

彼女がパジャマの袖で田元をこすった。  
赤く充血した目が、窓の外を見つめる。

秋。

空は高く、雲の姿は少ない。

剥いだ綿のような薄い雲がただ浮いていた。

「ねえ」

呼びかける彼女の顔は笑顔に変わっていた。  
その唇が滑らかに動く。

「明日も、これからも来てくれるよね？」

……もう、言おうとしたのだと想つ。

現実の彼女の言葉は途中で止まつた。  
止められた。

発作のせいだった。

今回の発作は前日のそれとは違つて、手術でビビリになるような  
ものではなかつた。

慌てふためく看護婦。

必死に大きな声を張り上げて指示する医師。  
ガラガラと不器用に床を転がるベッドのキャスター。  
赤く灯る『手術中』のライト。

田の前で起ころるすべてが、まるで昔のフィルムを見ているようだ

つた。

フィルムであれば、よかつた。

けれどそれは紛れもない現実で。

「明日も、これからも来てく……」

それが最後に聞いた、彼女の生身の声だったんだ。

日曜日。今日は、久し振りに完全フリーの日にした。

何かをしたかった、というわけではない。  
むしろ、何もしたくない気分だった。

三年前に大学を卒業して、順調に就職して、それからは安定至極の日々。

一ヶ月後には、結婚が控えていた。

本当なら今日も予定を入れるべきだったのかかもしれない。  
しかし、自分の中の整理を行うためには、どうしても足を運んで  
おきたい場所があった。

家から歩いて三十分ほどの所に流れている川。  
そこに架かっている橋の下は、ちょっとした広場 と言つても  
公園のようなものではなく、広い空間がある、というだけの  
なつていた。  
鮮やかな模様（波をイメージしているらしい）ではめられたタイ  
ルの階段を下り、橋の真下に下りる。

昼時前のせいで人の姿は見当たらない。

俺は広場を真っ直ぐ横切つて、川べりのベンチに座つた。  
目の前を左から右にサラサラと流れる水面を、ぼおつとして見つ  
める。

風は強すぎず弱すぎず、涼しさを持つて首から上をくすぐる。

彼女は現れなかつた。

一時間ほどただベンチに座つていた俺は、すつぐと立ち上がりつて  
思い切り背伸びをした。

胸の中までスッキリした気分だ。

俺は何を期待していたのだろう？ 何も期待していなかつたのか  
もしれない。

違う。

俺は一言、彼女に伝えたかつただけ。

「ありがとう」

と、ただ言つておきたかつただけなんだ。

それから一度と、俺はその川べりに行く事はなかつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4515d/>

---

未昇華の想い

2010年10月17日16時18分発行